M 資料 映画.

No.

◦ピンクパンサー 「開けてびっくり」			'65	
◦バッタ君街へ行く				
◦ヘルプ！				
◦才三の男	キャロル・リード	アリダ・バリ，オーソン・ウェルズ ジョセフ・コットン，	'49	英
◦TV映画 スパインライセンス 「ロボット」				
◦地下水道	アンジェイ・ワイダ			
◦黄金の7人	マルコ・ビッカリオ	ロッサナ・ポデスタ，フィリップ・ルロワ	65	伊
◦キートンの セブンチャンス				
◦新黄金の7人7×7	マルコ・ビッカリオ	ガストーネ・モスキン アドルフォ・チェリ	68	伊
◦ファールプレイ	コリンヒギンズ	ゴールディ・ホーン チェビー・チェイス	78	米
◦タクシードラバー				
◦パリは燃えているか				

A5 7mm × 25行 KING No.407-AP

M　資料　詩.

No.

マンホール.　山本　貢太	マンホール文芸会.

A5 7mm×25行 KING No.407-AP

M資料　新聞

No.

- 上野の黒ヒョウ

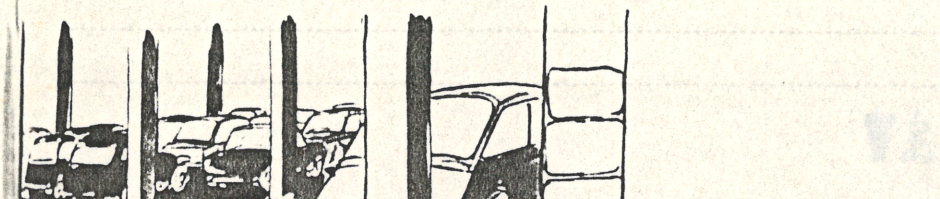
ールバス運転手
がった運河で見
ほら穴で全員無

中23日，容疑者
自首した。さら
でそれぞれ逮捕
いずれも24歳。
ス・シェーンフ

銀行付近の下水道栓からもぐって調査中の警察官

仏で銀行地下金庫破らる。被害総額は42億円（19日）

被害にあったのは南仏にあるソシエテ・ジェネラル銀行ニース支店。犯人は警備の手薄な週末をねらった。一味は６人以上で，銀行から1.5㌔も離れた場所から，暗きょの下水道にゴムボートを浮かべ，アセチレンや酸素ボンベをはじめ大量の強盗必需物資，食糧を運び下水道から地下金庫まで８㍍のトンネルを数日がかりで掘り金庫室に侵入，金庫室内の約 200の貸金庫から現金・証券・宝石など総額6,000 万㌦（約42億円）を持ち去った。「トラの子」を奪われた地元ニースの被害者たちは大騒ぎを演じているが，一般市民は手口のあまりの鮮かさにぼう然。なかには「全く申し分のない完全犯罪」と犯行に賛辞をおくる新聞もあらわれる始末。刑事生活三十数年というベテラン刑事も「こんな犯罪は見たこともない」と“脱帽”したとか。



犯行想像図

ご購入者がつくるページ　上段には写真等を貼り，下段にはご自身の'76年のできごとなどをつづり，"あなたの歴史"を記録して下さい。

豊島中央

日本写真年鑑'77　JAPAN PHOTO NEWS ANNUAL　**定価 4,900円**

©日本写真新聞社　1977年

昭和52年2月10日発行

編集・発行／日本写真新聞社
（日本新聞協会会員社）
本　　社／東京都中央区日本橋3—8—16　〒103
TEL (03) 271—1071（大代表）

北海道支社／札幌市北区北8条西3　日写ビル (011)711-2564
東京支社／東京都中央区日本橋3—8—16 (03) 271-7377
大阪支社／大阪市大淀区天神橋筋6阪急ビル (06) 351-3544
中四国支社／岡山市駅前町2—5—11 (0862)22-6970
九州支社／福岡市博多区上呉服町14—30 (092)291-3822

PRINTED IN JAPAN　印刷所／東京グラビア印刷株式会社
凸版印刷株式会社

911.167
M175m

マンホール

（本誌第一号より）

山本寛太

終日終夜
わたしの家の庭の
マンホールに
そゝぎ込む水の音がする

幾十けんの
流しの水があつまって
マンホールにそゝぎ込む音は
或はにぎやかに
或はひそやかに

マンホールのなかに
そゝぎこむ
下水のみずは
自らの圧力によって
地下の水に合流して
大地の底に
しみこんでゆく

えらばれて
わたしの家の庭に
掘られたマンホールは
幾十けんの
いとなみの
排泄のみずを
みんなみんな
ひきうけている

日々夜々
人々の
よろこびやかなしみ
遠い汽車の音も
ことごとくあつめて
しずまるマンホール

ま夜なか
野分けの風が
かすかに空にひゞくとき
思い出したように
何かつぶやく
マンホールの
私は
その心を知っている。

42.3.16

寄贈
江東区短歌会
殿

721187

あとがき

「マンホール文芸会」が発足してから、はや十年の歳月が流れました。ここに「十周年記念号」を刊行する運びに至りまして心より嬉しく思います。

寄稿を御願いした先生方や、会員の皆さんの御支援御協力により本号を飾ることが出来まして厚く御礼申しあげます。主宰者山本先生の助言により編集委員を国府田・渡辺・矢崎の三人に決め、他会員の援助もあって皆未経験の編集・割付・交渉等一切を自主的に致しました。今まで先生に頼り過ぎていたことを反省しておりますが、此の仕事も大変いい勉強になりました。製本は初めの計画より地味なものになりましたが、内容は各々の個性が発揮され、十年の精進が相当に実を結んでいるものと思います。

今後も短歌の道を一層深く掘下げて行き度いと念願しております。

同好の方々の御批判を賜り度く存じます。

昭和四十一年十二月十八日　矢崎

マンホール・十周年記念号【非売品】
昭和42年2月20日発行
深川千石町二ー二都営アパート四ー五
発行所　マンホール文芸会
深川千石町二ー二都営アパート四ー五
発行者　山本寛太
深川二ノ二九
印刷所　濤声社
（６４１）五九八七

911.167
M175m

マンホール

（本誌第一号より）

山本寛太

終日終夜
わたしの家の庭の
マンホールに
そゝぎ込む水の音がする

幾十けんの
流しの水があつまって
マンホールにそゝぎ込む音は
或はにぎやかに
或はひそやかに

マンホールのなかに
そゝぎこむ
下水のみずは
自らの圧力によって
地下の水に合流して
大地の底に
しみこんでゆく

えらばれて
わたしの家の庭に
掘られたマンホールは
幾十けんの
いとなみの
排泄のみずを
みんなみんな
ひきうけている

日々夜々
人々の
よろこびやかなしみ
遠い汽車の音も
ことごとくあつめて
しずまるマンホール

ま夜なか
野分けの風が
かすかに空にひゞくとき
思い出したように
何かつぶやく
マンホールの
私は
その心を知っている。

寄贈
江東区短歌会殿
42.3.16
721187

目次

ほんとうのたのしみ……山本寛太 2
冬の蝿……木島茂夫 3
四国路……新井賢一 6
肺手術……新井章 9
白鷺城……細田豊明 12
つゞつがなく……細田初枝 14
国境平……加藤勝三 16
毬栗……川島千代子 19
六義園……川又幸子 22
孫をみつめて……神田耕路 25
グッピー……北原ホノル 27
季節風……国府田洋子 30
すずめ……近藤未希子 33
木枯……高中静美 35
義兄病む……戸田哲 37
流灯……内藤初枝 39
羇旅雑詠……深山隆 42
へちま……茂木寿々子 45
折鶴……矢崎松枝 47
金盛花……山田香雨 50
まな下の村……山本寛太 51
夫の入院……渡辺みさほ 54
住所録……57 ● あとがき……58

チャップリン名作集　淀川長治監修　講談社　73-4-20　渋谷中央図

UNITE
LIBERTAD
LIBER
LIBERTY OR DEATH
DEATH
Clo
TIDE AVE
PO
PATR

て、フルシチョフ報告と一九五六年十月事件（ゴムルカの復帰）がおこった。ワイダはカムバックし、『地下水道』を作った。

原註① P・オーディケ「ポーランドの若い映画人たち」「プルミエ・プラン」二七号八三ページ。
② J・プラゼウスキー「カイエ・デュ・シネマ」八二号。
③ A・ワイダ「ポジティヴ」二五〜二六号。

『地下水道』

ワイダの二作目の長篇『地下水道』①は、世界にその存在をおし出そうとする新しいポーランド映画派の最初の映画である。フランス語に吹き替えられて、この映画は広く上映され、たくさんの論争を生んだが、その多くは、この映画の主題とかかわりないところだった。たしかに、主題はデリケートだった。それは、一九四四年九月に蜂起した小グループの最後の戦いの日を想起させる。一九五〇年には、公のプロパガンダは、この蜂起の状況とその条件にヴェールをかぶせ、ふれずにおく方針だった。蜂起した人びとの英雄主義を、劇的な歴史の内面とかかわり合いをもたせることは、公式のポーランド史に衝突する危険をおかすことになるのを、ワイダもまたよく知っていた。しかし、ワイダは、真実は語らるべきだと信じていた。一九四四年当時、アルミア・クラヨワ（国民義勇軍）の一員だったシナリオ作家のスタヴィンスキーは、下水道のなかのいたましい

行進を体験していた。ワイダもまた、このアルミア・クラヨワに属していた。ワルシャワの蜂起については、いろいろな見解が、まるでよりどりみどりのように対立している。この蜂起は、一九四四年八月一日、ロンドン亡命政権の命令のもと、アルミア・クラヨワの総司令官ボル・コモロフスキー将軍の指揮によって、口火がきられた。「ソビエト軍の事前の合意のもとに行なわれた」とロンドン亡命政権は主張している。しかし一方、「彼らに知らせずに行なわれた」と当事者たちは断言している。二カ月以上にわたって、約四万人の人びとが戦いに参加したが、連合軍の救援はほとんどなかった。九月中旬には河の向う岸のプラガにソビエト軍が入った。「彼らはわれわれを助けることができた。しかし、彼らはわれわれを裏切った」とロンドン亡命政権は断言する。「われわれは、諸君を助けることができなかった。危険をおかして、ヴィスワ河（ワルシャワの中央を流れる河）を渡ることは、重大な損失を招き、わが軍を、釣合のとれない事態にひきずり込むことだった」とソビエト側はいう。ソビエト軍は迂回して、ついに一九四五年一月ワルシャワに入った。事実、ソビエト軍は、自分たちの危険をあまりおかしたがらなかったことはあり得るだろう。しかし、ソビエト軍がポーランドに入って以来、ルブリンに樹立された委員会が、権力を要求しないだろうかと、ロンドン亡命政権はおそれていたので、蜂起の口火を切るのを望ましく思った。すなわち、外国軍隊の干渉なしに、首都を解放しようと思ったのだろう。

原註① フランスでは『彼等は人生を愛す』という題で公開された。

証人・ワイダはどちらの肩ももたない。彼は証言することを望む。彼は何よりも問うことを望み同胞たちに質問する。そして、彼らに何を示すつもりだろうか。疑いもなく、英雄たちだ。しかし、それは、犠牲として

何の役にも立たず、鼠のように殺された英雄たちである。ワイダは、英雄主義の賞揚と批判を同時に示す。彼は、そこで、国民的名誉についてもっとも敏感な部分にふれざるを得ないことをよく知っている。何故なら、ポーランドとはどんな国だったか、よく考えればこの点は理解できる。この国は百五十年にわたって分割され、反乱をおこして驚くべき勇気を示したが、すべては空しかった国である。コシュチュスコ（訳註、農民兵を組織し、分割に反対して闘った。アメリカ独立戦争のときワシントンの副官となる。一七四六～一八一七）が指揮する死の鎌をもった民兵たちからピウスツキー（訳註、ポーランド大統領、一八六七～一九三五）の国民軍にいたるまでその栄光のために、多くの世代を喜んで犠牲に供する伝統をもった国だ。一人の作家が、この伝統をいわば作品として具現した。すなわち、J・コンラッド（訳註、ポーランド生まれのイギリス作家、船員生活後イギリスに帰化し、文明と自然と人間の衝突を描く。一八五七～一九二五）である。J・コットはつぎのように書いている①。

「この時代において、コンラッドは、アルミア・クラヨアの心のなかに生きている作家だった。わたしは、この抵抗運動者たちのなかで、もっともすぐれた誠実な人びとの気持を理解したが、彼らは、コンラッドのなかに、すでに奪われてもなお持ち場をけっして捨てないように命ずる高揚した名誉心を見出した。また、彼らは、彼のなかに、精神的な孤独の正当化、社会的なすべての価値の完全な軽蔑、何ともいえない満足感を覚える内面のドラマをふたたび見出した。さらに、歴史に直面し、歴史の外にある、個人の道徳的な権利の正当性を読みとった」

しかしながら、ここに、一つの問題がおかれる。ワイダは、たしかに、この英雄主義の空しさを告発する。しかし同時に、英雄主義への嗜好を持つ。ポーランドの批評家たちは、この点を強調した。ムンクは、同じスダヴィンスキーのシナリオで、英雄主義の神秘をはぎとろうとして、「辛辣なアイロニーと合理主義で」②ぶつかった。「スタヴィンスキーの意図としては、『地下水道』は『エロイカ』（ムンク）と同様な意味で反英雄主義をもっている。しかし、ワイダの生来のロマンチックな資質は、この地点に止まっていない。彼の感受性は、間違った英雄主義を嘲笑するよりも、むしろ、登場人物たちを英雄化する傾向をもっている③」

ワイダとムンクの性格は対照的だといえよう。ワイダは、彼の若い頃の仲間たちや、ファッシズムがそこにあったから反抗の方を選んだ人びとを、何とか正当化する方法を、とにかく混乱しながら捜す。――そして、この点は『灰とダイヤモンド』でもはっきりしている。ワイダの作品で人を感動させるもの、もっとも大切な彼の知的態度を形づくっているものは、人間の行動にたいする注意深い理解への努力、知的なものでなく肉体的な方向にまず向けられる理解への努力である。蜂起の空しさを、結局、はっきり知らせるのは「歴史」である。しかし、戦いの最後の日、これら英雄たちは、戦いの結末について、なんらの幻想も持たなかったとしても、生命の優位、愛の優位については、最後まで確信しつづけた。彼らに注がれるワイダのまなざしは、同胞愛と親愛の情をこめたものだろう。

原註① J・コット「十年……」「現代」一三一～一三三号。

② 「ポーランド映画」四四ページ。

③ 同右。

エロイカ・ワイダのねらいは、英雄主義の高揚とその空虚さとが結びついた行動のなかで、人物たちを対決させるところにあると思われる。冒頭の映像は暗示的で、この意図をよく明らかにしている。夕陽のなかで、

最後の戦闘は幕を閉じる。

長い移動撮影が、中隊の退却を描く。無表情な声が、人物たちを紹介する。「これは悲劇の主人公たちである。彼らは、われわれのために、その最後の時をすごすためにやってきた」。彼らの背後では、日ざしのなかで、戦いがつづいている。カメラは、担架の上に横たわっている少女の位置で止まる。一人の男が、大丈夫かときく。彼女は、落ちついて、気分はいいですと答える。担架を持ち上げると、彼女の上にかけていたひざ掛けがすべり落ちる。彼女は敵弾で足を失っていた。この巻頭の部分は、作品の劇的な雰囲気を、はっきりととらえている。もはや、死を免れないと知っている戦士たちの、英雄的な無頓着さをよく描いている。

たしかに、他の作品では、死が人間を締めあげる時の、戦士たちの気軽な、みせかけの無頓着さや、死を否定する強い意志が描かれている。しかし、生の根源的肯定と死の偶然性との間に生まれる力関係と緊張について描いたものは少ない。ワイダは、彼の力量が十分発揮されたシーンでは、この力関係を映像化できた。

この観点からみて、もっとも美しいシークェンスの一つが、この作品の最初の部分にある。戦闘がふたたび始まり、人びとは急いで廃墟の家を占領して、機関銃をすえつける。戦車が、小高い丘にあらわれる。スムルキー中尉①が撃つ。戦車は一瞬止まるが、ただちに、二つの小さなキャタピラーを動かし向ってくる。二階にいたコラブは手袋をかなぐりすて、シャベルをいきなり摑んで、塹壕のなかへとびこむ。砲弾がうしろで破裂する。カメラのトラックバックは、塹壕を走ってゆくコラブをとらえる。彼は、キャタピラーの方へ這ってゆき、とびかかり、数メートルひきずられるが、それを切断する。塹壕の盛り土の上へふたたび投げ出され、機関銃の一斉射撃を受ける。このシークェンスは、シーンの発展の連続性と、人物とカメラの動きの並行性に、その価値がある。そして、とくに、観客がコラブの成功に拍手する時でさえ、戦いには、まぐれ当りがつきものだと考えさせ、英雄主義の美しさと空しさを、肉体的にまで感じさせるこの最後の破壊のシーンに、その価値がみとめられる。シナリオ（そしてモンタージュ）は、英雄主義の高揚と失墜を描きながら、劇的な筋を直截に作り上げている。ワイダは、筋を発展させる時、彼の美学の原理を忠実に守っている。その原理とは、コンテのなかに、理解するための対立する二つの極を創造するということである。

空間・そして、さらに、人物たちの諸関係の結びつきは、時間が短く、空間が狭いほど、緊密なものとなる。ここに、ワイダの美学の第二の方法論がある。ワイダは、シナリオにもとづく劇的な結びつきよりも、むしろ、人物たちの相互関連のなかで、また、空間と対象とに人物たちを結びつける関連のなかで、演出が築き上げる結びつきをしだいに好むようになる。コラブとパークレット①の二人を描いた部分ほど、これがはっきり示されているところはない。二人のはじめての出会いの前に、コラブの足どりを追う。重要なのは、その場所と動作が、空間を直接的にはっきりさせるということである。前に述べた戦車事件のおこる数時間前の、屋外シーンで、コラブは、上半身裸で、井戸の方へ歩いて行く。しかし水は出ない。彼は廃墟の家へ入り、ピアノに沿って歩き、そこにいた作曲家と言葉を交わす。扉を押して、彼の仲間たち、ハリンカとマドレイ中尉②がベッドのなかにいるのをみつける。彼らは、彼に、パークレットがどこにいるかきく。彼は扉をふたたび閉め、上手（かみて）へ行き、隣の部屋へ入る。彼は坐って、ひびわれた鏡の前で髭をそる。パークレットがあらわれる。彼女は地下水道から戻ってきたのだ。長靴の匂いがとても強いので、彼女はそれを外へ投げ出す。彼女はコラブの方へ近づき、彼の背中を髪でこする。コラブは素直になれない。彼女が仲間の指導者ザドラへ笑いかけた

原註①　スムルキーはある種の翻訳版では「ル・グラン」といわれている。

ことを咎める。「わたしはわたしよ」と彼女はいい、口紅をぬる。そして、彼にたばことお茶をすすめる。「誰がくれたんだ?」「――伯母さんよ」。彼女は奇妙な笑いで答える。そして、「わたしはあなたのためだけに帰ってきたのよ」と低い声でつけ加え、コラブの肩に顔をすりつける。「君はくさいね。シャワーを浴びるといいんだ」と離れながら彼はいう。彼女は鏡の前に立ち、（カメラはその写った影を利用する）ブラウスを脱ぐ。彼はうしろからその肩を抱く。隣の部屋で、マドレイの声がきこえる。「そして、村では、君はいつも伯母さんの家にいたの?」コラブとパークレットは共犯者のように笑い、抱き合う。一発、また一発と、砲弾が破裂する。しっくいが部屋に散る。コラブが扉をあけると、砂埃が彼らを包む。

　映像の連続性をできるだけ尊重しながら、わたしがこのシーンをくわしく描写したのは、その重要性を認めるからだ。（このシーンは、あとのワイダの作品のなかに、いろいろな痕跡を残している。たとえば、『灰とダイヤモンド』のなかで、シュチュカがスタニェヴィッツ夫人を訪ねるシーンでは、同様に、鏡のなかに写った人物の姿を利用している。『ロトナ』では、グラボフスキーと女の教師との最初の出会いは、同様に、砲撃によって中断されてしまう。そして、同様に、しっくいが天井から落ちてくる）。

『世代』の場合よりも、人物たちの行動は、空間や彼らの身振りと直接に結びついている。人物たちについての観客の理解は、この空間の紹介や身振りによって、さらにすすむ。コラブは、時間的、空間的連続性のなかで、また、その緊張とためらいのなかで、とらえられる。パークレットに抱く感情は、あえていわないこと、やさしさ、共犯性によって成り立っている。観客は、彼の反応を通じて、これら複雑な感情を理解し、その葛藤を意識しながら、彼にたいし距離を保つ。やがて観客の意識は彼に密着するが、――マドレイの声が彼をわれにかえらせ――観客は、また、彼がわからないままになる。『世代』、そして、『地下水道』でもよくあるのだが、シナリオや対話によって設定されるままになっていた人物たちの心理は、ここで、漠然とはしているが理解される（『地下水道』で、味方の逮捕を電話で知る作曲家とか、その言葉づかいが性格をあらわしているザドラを考えるのだ）。そして、コラブのためらいに、パークレットの緊張が答える。彼女の身振りは、言葉以上に、その性格をあらわす。彼女は、やや気楽なところがあるが、その感情の動きに誠実であり、愛情の表現に遠慮勝ちであることを観客は見抜く。わたしは、このシーンが完全だとはいわないが、相対する心理の相乗作用によって、感動し、感じ易くなる（『世代』の愛のシーンのなかで、消燈を口実にして、夜、ドラがスタッチをひき入れる時も、この緊張感はあまり強くないし、対立はもっと単純である）。ここにはじめて、ワイダは、映画の世界の心理的関係をはっきり示したと思われる。すなわち、重点が絶え間なく変わる緊張の連続がここにある。シーンの終りが、観客を戦いの現実に導く。ワイダの作品の主なシーンを支配する演出原理が、ここで、ふたたび見出される。すなわち、個人的テーマから集団的テーマへと変わり目なしに展開するということである。

原註① 翻訳版では、パークレットはマルグレットとよばれる。

② マドレイは、時にフィノー、時に「ル・サージュ」とよばれる。

戸外から閉じられた空間へ・観客の目は、閉じられた場所から、広々とした外部へ移る。この対照は、作品を支配する原理の一つだから、ワイダにとってたいへん重要である。『世代』は、構成が厳しくないと批判された。『地下水道』では、最初から、がっちりした骨組みがつくられた。この作品は、二つの部分にわけられる。すなわち、破壊された地区に太陽がかがやく午後、地下水道の暗闇のなかを、光をめざして進む長い行軍。

この対照は、他の対照を支配している。はじめの部分の、光にみちあふれた風景は、それにつづく部分と、荒荒しい対照をみせている。写実的な音響効果のかわりに、場所をうまく表現するエコーと共鳴をつかう。しかし、この音の要素は、人物たちの心理の展開に役立つにすぎない。最後の戦闘における静かな英雄的な行為をみているうちに、われわれは、知らず知らずのうちに、落胆、恐怖、不安、絶望の感情を味わう。

この展開は、うたがいもなく、肉体的な行動から、とくに、人物たちと空間をむすびつける関係から、とらえられている。二番目の部分が一番長いのは、ワイダが、地下水道のなかの苦しい行軍、臭くてたまらない暗闇のなかへの墜落、だらだらつづく悪夢のような、出口のない長いトンネル、こうしたものを、肉体的苦痛として、観客に感じさせようとしているからだ。

この映画の三分の二をしめ、題名にもなっているこのオデッセー（冒険の旅）では、興味は分散されている。三つのグループが迷路を通る。第一のグループには、ザドラ、クラ、スムルキーが、第二のグループには、パークレットとコラブが、第三のグループには、マドレイ、ハリンカ、作曲家のミッシェルが、それぞれ属している。批評家たちは、この三つのグループのモンタージュがうまくないことを強調する。

しかし、マルセル・マルタンは、つぎのようにいう。①すなわち、この作品はいろいろな方向にまよいあるく多くのグループの、彷徨と恐惶状態をあらわしている。観客は、だいたいの地形図も、各グループのおたがいの位置もよくわからない。そして、「観客のまよいは、登場人物たちのまよいに対応する」。実際のところ、シナリオは、観客が各グループの位置をのみこむように、巧みに作られている。ザドラに案内された人びとは、打ちすてられた大佐の死体のそばを通りすぎる。そして、「ヴィルツアー通り」の標示板をさがしているうちに、「ジャックがすき」と書いたパークレットの文字を発見する。パークレットは、コラブをたすけながら、大佐の死体のそばをすぎ、「ジャックがすき」という文字の正面に、「ヴィルツアー通り」という文字を読む。この時、ハリンカやマドレイより先にあるいている作曲家は、パークレットのところに追いつき、一人で進んでゆく。しかし、この関係のとらえ方は、終局のモンタージュでも、やはり、下手くそな感じである。事実、撮影上の物理的なむずかしさがあり、アクションが限られているために、場所を示す厳密な地形図を、はっきり示すことができなかったことはあり得る。（製作上の条件については、スタヴィンスキーがあきらかにしている②。すなわち、『地下水道』は、ウッジの撮影所の構内に、百五十メートルにわたり、地表に完全に再現されました。分岐点、側面溝、迷路、そのほか、いろいろな種類の地下水道が、正確な寸法で作られました」。撮影期間は？「一カ月半かかりました。この撮影は、おそろしく骨の折れるものでした。とくに、よどんだ水に腰までつかった俳優たちや技術関係者にとってつらいものでした。われわれは、かぞえきれない困難とぶつかりました。水中のケーブルがショートしたこともあります」）。

二番目の部分の構成は、ワイダの演出意図をはっきり示している。

最初、パルチザンたちは、出口が見張られていることを知る。泥のなかから出てきた彼らは、いちめんの煙に驚いて、ガスもれだと思い、ひきかえす。そのうちの一人は、地下水道の出口へあがってゆく。烈しい閃光とその男の墜落。ドイツ兵が、手りゅう弾をなげたのだ。少したって、コラブは臭い水のなかへ入ってゆくが、頭をあげて、咳をする。上の方から容赦ない閃光がひらめき、手りゅう弾が火をふく。こうして、観客の感動はたかまる。いつまでも続く迷路、ほかのトンネル、地下へ通ずるトンネル、地下の悪臭にみちた空間、これらには出口がない。閉じこめられた場所と、閉じこめられた人びとと、外部との間に、一つの関係が生まれる。あか

るい場所につくたびに、敵の姿がある。死以外に残された道はない。

敵に包囲されたパルチザンたちは、地下水道のなかに避難場所をみつけるが、まさに、袋の鼠である。ワイダは、映像をつかって、この感覚を観客に伝えることに力を入れる。

しかし、同時に、ここで、彼の美学の不変の原理、すなわち、外側と内側（屋外と屋内）のかかわりあいという美学の原理を発見する。『地下水道』やそれにつづく作品では、この関係はたいへん重要である。これは、自然光と照明、心理と感情の対比とむすびついている。壁にふさがれ、悪臭がたちこめる暗いトンネルのなかで息がつまる印象をあたえるためには、日光の烈しい光線が同時に死をもたらすこの二つの要素を示すだけで充分である。太陽のもとでの戦闘と、地下での彷徨と、はっきり対照的な二つの部分の連続で構成されているこの映画では、二番目の部分にまでこの対比がおかれ、その意味を強める。何故かといえば、パルチザンたちのただ一つの希望は、死ぬことしかないのだから。映画のコンテは、この関係の機能作用となるだろう。

各グループは、それぞれ光を見出すが、べつべつの理由で、それは死を意味する。脱出の場面は、それぞれ、劇的な筋の展開や映画的な連続性のなかに、この対比が行なわれることによって、高揚される。ハリンカの自殺は、マドレイの脱出より前に行なわれる。気が狂った作曲家は、コラブとパークレットがヴィスワ河へたどりつく前に、通りすぎる。スムルキーは、ザドラの脱出より前に死ぬ。

映画のコンテは希望と死、外側と内側という喰い違いの関係を、三度くりかえすことによって、はっきりその効果をみせている。ハリンカは自殺する（ワイダは、砲撃の間に、マドレイの顔をダブらせ、つぎに、カメラのパンダウンによって、娘の血だらけの動かない頭をみせる）。マドレイは梯子をよじのぼる。カメラは外側から彼をとらえる。地面すれすれに、彼がもち上げた地下水道の蓋、つぎに彼の腕、おろした機関銃、明る

い広場に投げかけるまぶしそうな、よく見えない彼の目をとらえる。ついでカメラは、彼が上ってゆくにつれてうしろへさがり、下手（しもて）に、ドイツ軍将校の長靴をとらえ、つぎに、将校の体、つぎに、封鎖された広場をとらえる。そこには、戦車と、手を上にあげている捕虜たちがおり、むこうには、死体が山とつまれている。このようなカメラの動きは、観客に、自分がマドレイになったような感じをあたえ、映画がねらっている二つの基本的な緊張、すなわち死とまじりあう解放を、観客と主人公の交流のなかでむすびつける。

第二のグループは、どうなるだろうか。カメラは、コラブとパークレットのおぼつかない足どりを追う。コラブはたえまなくすべり、パークレットはそのたびに彼をおきあがらせる。彼らは、ヴィルツァー通りの下につく。ひどく傾斜した横長の穴がみえる。彼女は、機関銃とたいまつを持ち、腰をかがめて、先に立ってそこに入りこむ。カメラは、後退しながら、それをとらえる。コラブの手が、パークレットの方へのびる。パークレットは、コラブを導きながら、石の上をすべりおちる。しばらくして、作曲家ミッシェルは、彼らとすれちがいに、一人で遠ざかる。二人は彼についてゆく。カメラは、あとずさりしながら、彼に先行する。パークレットの唇に微笑がうかぶ。カメラは、彼らが進んでいるトンネルをみせる。長い通路の奥に、一条の閃光がひらめく。コラブとパークレットが抱きあっているのがわかる。しかし、急に、微笑がきえる。観客は、切りかえしによって、外壁に写っている鉄格子の影を見分ける。その時、カメラは、ゆっくりと格子のはまった鉄蓋のところまで進み、二人が画面に入った時、停止する。ヴィスワ河がみえる。そして、二人が画面からフレームアウトすると、カメラはわずかに上って、河のむこうにあるプラガの町をみせる。

説明的に動くカメラによって、観客は、パークレットの視線をおって、事態を知ることができる。この視線

が、カメラの動きをきめ、内側と外側、希望と死の二重の関係をきめる。最後に残されたのは、一つの問いかけである。「あのプラガには、ソビエト軍がいる。何をぐずぐずしているのだろうか？」

　三番目の出口も、ふさがれている。ドイツ兵はバリケードに手りゅう弾をぶらさげている。二人の仲間の脱出を助けるためには、一人が死ななければならないだろう。しかも、この脱出はそのまま解放を意味しない。家が潰れている内庭で、隊長のザドラは、救援部隊の裏切りを知る。部隊が彼らについてきていると信じていたのに、今や、彼らが最後の生き残りであることがわかった。命令を下してから、彼は、また、地下水道におりてゆく。最後のシーンは、地下水道の蓋をしめた時の、彼の悲しみに沈んだ視線で示される。クラの死体のまわりには、大切だがもう役に立たない認識票が、風に舞っている。

　渡れない河、死体のまわりに舞っている紙片――こうした映像はたしかに成功している。なぜなら、これら映像がひき出した観念が、映像が示す現実とむすびついているからだ。しかも、どの映像も、他を犯していない。そして、これら映像は、観客に同じ観念を示し、そのあとにつづく映像が観念を得るか得ないかということに関係なく、こんどは、その影響力を発揮する。このつぎつぎとつづく映像には、観念をあらわす際に一種の冗漫さがみられる。ダイナミックな演出は、この冗漫さがもたらす静止状態によってうすめられる。たしかに、将来、ワイダの美学は、つぎのような構想にしたがうだろうと思われる。すなわち、映像を象徴で充実させ、さらに、一段と、観念のダイナミックな動きがつづくよう注意するだろう。『灰とダイヤモンド』のなかで、マチェックとクリスチーナは、夜、散歩し、三度足をとめる。

　その画面構成、二人の対話、えがかれた対象の象徴的な価値によって、各シーンは、一つの観念から他の観念へとつづいていく。

　すなわち、愛から死へ、結びつきから別離へと。この際のえがかれた対象とは、マッチの火でクリスチーナが読む墓碑銘、風にきしむキリスト像、礼拝堂とそこにおかれた二つの死体をさす。ずっとあとになって、ワイダは、二つの映像を結びつける観念によって支えられるだけでなく、二つの映像そのものである要素に支えられたより緊密な対応をさがし、時として、この対応をうまく見つけることができた。『地下水道』では、シナリオと演出の間に、まだすき間がある。人物たちは、たいへん型どおりだ。スムルキーは勇気があり、誠実であり、マドレイは臆病者で嘘つきである。そして、その性格は、いつも、科白でえがかれる。観念の間の諸関係や、さまざまな象徴は、まるでアンダーラインをひいたようである。マドレイは、自殺用の武器を女友だちのハリンカに与える。家に電話して、ドイツ軍がすでにきていることをさとった作曲家は、妻にもう会うことができないと思い、ピアノに近よって、鍵盤にちょっと手をふれ、「音程が狂っている」とつぶやく。シナリオは、演出のじゃまをしている。

原註① M・マルタン「高等映画学校の紙片」。

② スタヴィンスキー、S・デュブリュイルのインタビューに答えて、「レットル・フランセーズ」一九五七年五月二十三日号。

十月事件以後

一九五七年～五八年は、ポーランド映画にとって、実りの多い時期だった。さまざまな政治的事件やその過

著者のアドラン・トリノンは一九二九年ベルギー生まれ、リェージュで弁護士を開業するかたわら、映画批評をベルギーの雑誌に寄稿している。とくに、ポーランド映画については造詣が深い。

訳出にあたっては、岩淵正嘉、進藤重行、丸尾定、小笠原真一氏等の御教示をうけた。また写真の提供については、フェニックス・フィルムに大きなお世話になった。記して感謝する次第である。

また、原典の出版後に発表されたワイダの作品については、巻末の作品年表に追補したが、編集には、三一書房の畠山滋氏の御協力を仰いだ。ここに厚く御礼申し上げる。

一九七〇年八月

金子恵一

現代のシネマ　6　アンジェイ・ワイダ
1970年9月30日　第1版第1刷発行

定　価　750円
訳　者　金子恵一　©1970年
発行者　竹村　一
発行所　株式会社三一書房
東京都千代田区神田駿河台2の9
電話東京(291)3131〜5番
振替東京84160番
郵便番号101
印刷所　誠和印刷株式会社
製本所　株式会社鈴木製本所
落丁・乱丁本はおとりかえします

1374-701606-2726

週刊朝日

大正11年2月25日第3種郵便物認可通巻3395号
昭和58年1月28日発行(毎週金曜日発行)
昭和24年3月28日国鉄特別扱承認雑誌　第310号

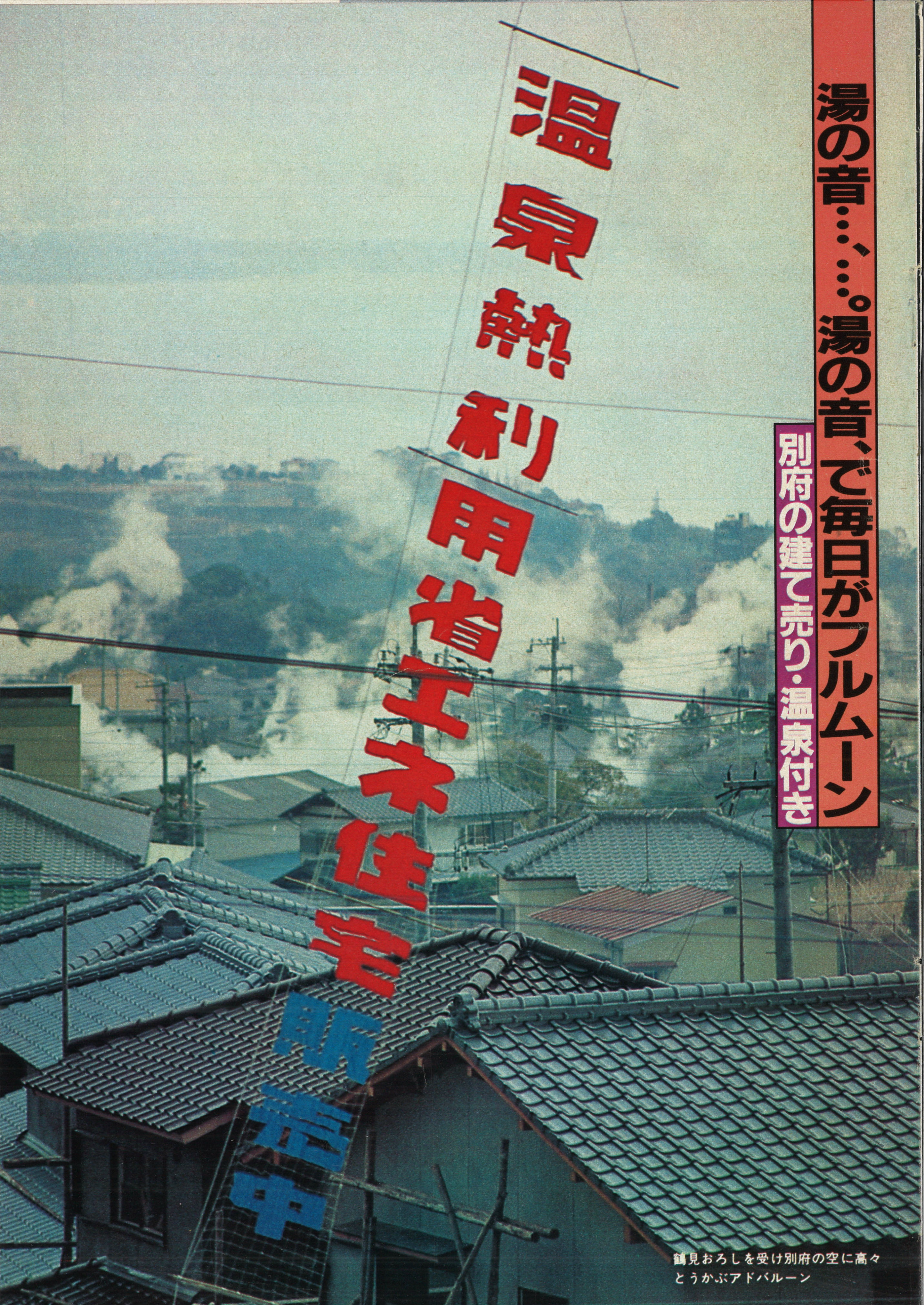
1983
1-28

220円

蓋をあけて入浴しても別にかまわない

湯の音…、…。湯の音、で毎日がフルムーン

別府の建て売り・温泉付き


温泉熱利用省エネ住宅販売中

鶴見おろしを受け別府の空に高々とうかぶアドバルーン

月　日　時

パリの路上に犬のウンコがたくさんおちてることはもう
かなり有名である。ドイツ、スイスと比較的路上の犬のウンコが
日本並の国をまわってきて、~~久しぶりに~~ ○日ぶりの フランスは＿＿＿も自分のミュールーズー 中心部分
についた。駅のホームに一歩おりると、ああフランスだなと思った
なんとなくホームの上や階段がキタナイのである。ここで「フランス―パリ―
犬のウンコ」と連想できればよかったのだが、~~パリ~~ ミュールーズ この時は不覚にもミュールーズ―フランス
―キタナイという連想でとまってしまった。

いつものようにまずホテルをきめ ~~[illegible]~~ いつものようにブラブラと ~~散歩に出かけ~~
まず＿＿＿という公園に行った。冷夏のせいか落ち葉がつもっている公園内を
鳥の観察などをしながら歩いていた時、なにかグニュッとした感しょくが
右足のくつのウラであった。「ああ、もしかしたら」と直感したが、この不名誉な事件を相棒に
気づかれないように、落ち葉~~を~~にすりつけたりし ~~[illegible]~~ ながら ~~知らん顔~~ ~~スナップをとる~~
~~なにくわぬ顔で[illegible]~~ 歩いた。あれは ひとしきり歩きベンチで休んだりしたあと
公園をでて街中の散歩をはじめた時だった。

ヨーロッパではめずらしく、主人につれられていない、自由に散歩を
しているらしい犬がうしろからトットッコトッと軽快に
私をおいぬいたと思ったら、ピタッととまり、ふりかえりざま
僕の顔を見上げたのである。それも「~~あっ、おまえ犬の~~
~~ウンコ、ふんだろう~~」~~とでも言うような顔して~~ いいたげな ~~目つきで~~
いった調子で いぶかしげに しばらく ながめていた
~~しばらく目があった~~ の間。あまりジっとみられたので、僕が吹きだし「ダハハ…」と

「あれっ？ なんだ こいつ人間のくせに犬のニオイがする。おかしいなぁ」

「さっすが犬の鼻はごまかせない」と思って
相棒に事情を ~~たまっていたことを~~ 自状して路上で 二人して 大笑いをした。

きっとあの犬は自分のなわばり の公園中に ~~[illegible]~~ の犬のニオイがしたので 急に
オレのなわばり~~を~~をあらしやがってと思い、~~いつもだったら~~
電信柱にオシッコを ~~する~~ ~~[illegible]~~ ~~かっこよく片足を上げ~~
で ~~やるところ~~ しようと ~~思ったら~~ と立ちどまったら ~~人間からしていた~~ それが電信柱ではな
人間だったのですっととまどったのではないかと思う。
そのあと近くの公園のベンチにすわって休んでいると

サイギン

月　日　時

フタ　何種類　形 サイズー

パターンの種類.

消火栓

右よみ、左よみ.

排気弁 ↔ 弁.

氣

サイギン

月　日　時

こんどは散歩中の黒いテリアがとおりかかった。

（やはり）
「きっとあいつも'オレの足のとこにくるぞ」と言~~[illegible]~~っていると

案の定 ~~タンタン~~ とちゃあんと（こいつが）僕の ~~[illegible]~~ 同級の

右の足のまわりをかぎまわったのである。

タンタンと

~~こいつは目が毛にかくれていて表情がわからなかったが~~

あとにも、さきにも犬のウンコをふんづけたのはこの時かぎりだった

その後　僕が

フランス内では注意深くなり

~~しかし[illegible] どこでも犬のウンコの名所~~

たいていフランスはどこでも犬のウンコはたやすく

見つけることができるが、実際どの程度

585
0411

9:10

4F

渋

赤坂 3-10-6

~~みつけ~~
ひのでビル

~~[illegible]~~
~~ふじわら~~

下北沢

オレ[illegible]メーカー

次長
ふじわらさん

金内製作所
堀越さん

テレビ広告部長

サイギン

960-2151
板ばし

地下埋設物台帳.

2-7.

路政課 台帳係

公文書

第一建設事務所

内線

5111 34369

陸軍 電話.

国安内

近之支団司令部

東京通信局.

588 8071 広報課 報道係

③ 戦前 → 戦後 までの

マンホール・ハンドホールの数

の 変せん.

① 軍用電話について

② 軍用電話のひかれていた所.

路線図.

⑤ 気送管はつかわれていたのか!

（Mはあるか、区切りは いつから つかわれていないか）

警察電話 一部は電々公社の回線をつかっている

警視庁 通信課

公研

小林

ほとんど専用線としてつかっている

④ フタはいつごろ使われたか、
から.

Mの古い ~~使用頃~~
フタ しよう書はあるか

フタの写真

第一建設事務所
　中．明石町2-4　542-7641

二　新．品　広町2-1-36
　品川区総合庁舎内
　774-6666

3　中．中の4-8-1　中の総合庁舎内
　387-5171

4　豊．南大塚2-36-2
　947-3141

5　かつしか区　東新小岩1-14-11
　692-4651

6　足，千住東2-10-10
　882-1151

管理課　道路台帳係

◎ 道路台帳係
└総括的なことをきく

都庁　212-5111　内線34369

月　　日　　時

150

下水 42
上水 35
電・ガ 26
牛乳 42 — 145 40p

関東東北 49
関西・中部 57
南 52 — 150 60p

サイギン

読者欄

近代土木文化遺産としての名著100選

日本土木文化遺産調査会では鹿島財団助成金をもって，近代（明治より終戦まで）土木関係出版書の目録の作成および保存書の選出の調査を2年継続で行った．

昨年度で約2000冊に達する出版書目録の集成を完了し，本年度はこの目録を基とし，この中より古典的名著と考えられるものをアンケート調査により約280書を選出することができた（詳細は土木学会誌55年10月号，pp. 49～57参照）．

なお，再びアンケート（144名へ発送，127名より回答，回収率88%）によりこの約280書の中から図書館・土木教育機関での必備書と考えられるものを厳選し，その結果を当調査会で下表のごとき土木工学シリーズ1つを含めた100書にまとめ，これをもって，保存書目録とすることにした．

古典的名著というものの選出は選出者の主観によって左右され，選出者の数が多ければ多いほど，それをとりまとめると幅の広いものにならざるを得ない．

何はともあれ，近代土木文化遺産のひとつである近代土木関係出版書の古典的名著はこの100書の中から選出することができると考える．ご多忙のところ再アンケートにご協力いただいた方々に厚く感謝いたします．

（日本土木文化遺産調査会代表　名誉会員　**飯吉精一**）

1.　土木工学関係書（77書）

No.	初版年	著者	題名	発行所	体裁頁数	備考
1	明8	市川義方	水理真宝（巻之上・下）	田中水理館	A5和 計112丁	明30博文館より「図解水理真宝」として再刊
2	〃9	佐藤信有	隄防溝洫志	名山閣	B5和4冊	
3	〃13	水野行敏	蘭均氏土木学（上・下）	文部省	B6　計1667	原著ランキン
4	〃14	内務省土木局	土木工要録（天地人3冊・付図2冊）	有隣堂	B5　和275	代表　高津儀一
5	〃14	大鳥圭介	堰堤築法新按	碧雲名園	A5　288	米国ゼイレッフェルド社刊行
6	〃19	宇野円三郎	治水本源砂防工大意	申々堂	B5　和12丁	
7	〃21～24	田辺朔郎	袖珍公式工師必携（3冊）	村上勘兵衛	A7　計476	明30丸善より合本発売，大1改訂版
8	〃21	HIROI, I	Plate Girder Construction, 1888 [Van Northland Science Serress 95]	Van Northland New York	A7　100	
9	〃24	西師意	治水論	清明堂	B6　121	
10	〃24	田辺朔郎	琵琶湖疏水工事図譜	著者	A4　36図	
11	〃27	二見鏡三郎	土木必携	建築書院	B6　132	
12	〃29	田辺朔郎	水力	丸善	A5　72	大4改訂版
13	〃31～35	広井勇	築港（巻一～巻五）	工学書院	A5　計1097	明40丸善より前・後篇として再刊
14	〃38	HIROI, I	The Statically Indeterminate Stresses in Frames Commonly Used for Bridges, 1905	Van Northland New York	B6変　170	
15	〃39	井上秀二	鉄筋コンクリート	丸善	A5　170	わが国最初のRC書
16	〃43	柴田畦作	工業力学	丸善	B5　260	
17	大1	鶴見一之 草間偉差武	土木施工法	丸善	A5　390	
18	〃2，3	君島八郎	君島大測量学（上・下）	丸善	A5　計714	
19	〃4	岡崎文吉	治水	丸善	A5　298	
20	〃4,5,8	川口虎雄 ほか5名	土木工学（上・中・下）	丸善	A5　計1791	
21	〃5,7,11	日比忠彦	鉄筋混凝土の理論及其応用（上・中・下）	丸善	B5　計1871	
22	〃5	阿部美樹志	鉄筋混凝土工学	丸善	A5　477	
23	〃6	二見鏡三郎	鋼拱橋及鉄筋混凝土拱	工学社	A5　307	大13増補版
24	〃6	鶴見一之	鶴見下水道	丸善	A5　290	大11，14，昭10改訂版
25	大7～昭2	君島八郎	河海工学（第1～第6篇）	丸善	A5　計2608	
26	〃10	HAYASHI, K	Theorie des Trägers auf eldstisher Unterlage und ihre Anwendung auf den Tiabau, 1921	Springer Berlen	A5　301	1972リプリント版
27	〃11	田辺朔郎	とんねる	丸善	B5　219	
28	〃11	小野鑑正	材料力学	丸善	B5　570	
29	〃12	森慶三郎	最近下水道	丸善	A5　342	
30	〃12	森慶三郎	最近上水道	丸善	A5　350	
31	大13，14	逓信省	水力調査書（第1～第6巻）	電気協会	B5　計2965	大3第1次報告書
32	大14，昭3，10，14	内務省土木試験所	本邦道路橋輯覧（1・2輯，増補，3・4輯）	土木試験所	B5　計851	
33	大15，昭5	大藤高彦 近藤泰夫	構造強弱学（上・下）	丸善	A5　計1034	
34	昭3	鷹部屋福平	架構新論	岩波書店	A5　286	図63
35	〃3，4	復興局	橋梁設計図集（第一～第三輯）	シビル社	B4　計176	
36	〃4	草間偉	上下水道[萬有科学大系　続篇12巻]	誠文堂	B5　計296	野口：水力電気と合本
37	〃5	山口昇	応用力学ポケットブック	鉄道時報局	B6　256	

E.Adeney　The dilution method of sewage disposal　-do-　1928

No.	初版年	著者	題名	発行所	体裁頁数	備考
94	昭11	土木学会	土学工学用語集	土木学会	A 6　558	
95	〃11	加藤誠平	橋梁美学	山海堂	B 5　115	
96	〃12	故古市男爵記念事業会	古市公威	同会	A 5　438	
97	〃16	有馬宏	トンネルを掘る話	岩波書店	B 6　298	[少国民のために] シリーズ
△ 98	〃17	土木学会	明治以後本邦土木と外人	土木学会	A 5　295	
99	〃17	鷹部屋福平	橋の美学	アルス	B 6　96	アルス文化叢書

3.　土木シリーズ（1 セット）

No.	初版年	著者	題名	発行所	体裁頁数	備考
100	昭5～8		高等土木工学（第1巻～第20巻）	常盤書房	A 5　平均 520	全20巻31編構成

1. 応用地質学／応用地震学／土性力学（平林　武／物部長穂／山口　昇：昭 7）　2. 応用力学／応用水理学（高橋逸夫／村野為次：昭 7）
3. 測量学（関　信雄：昭 6）　4. 土木材料（藤井真透：昭 7）　5. 基礎工及土木施工法（谷口三郎：昭 7）　6. 鉄筋混凝土工学前編／後
7. 土木工事用器具機械／隧道工学（志水直彦／瀧山　與：昭 6）　8. 道路工学（牧野雅楽之丞：昭 6）
11. 軌道工学／高速鉄道工学（佐藤利恭／清水　熙：昭
（鈴木雅次：昭 6）

No.	初版年	著者	題名	発行所	体裁頁数	備考
38	昭5	TAKABEYA, F	Rahmentaferen, 1930	Springer Berlen	A 5　117	
39	〃7	鈴木雅次	港工学	常盤書房	A 5　738	
40	〃7	真田秀吉	日本水制工論	岩波書店	A 5　376	
41	〃7	吉田徳次郎	鉄筋コンクリート設計法	養賢堂	B 5　682	
42	〃7,8,12	小池啓吉	小池橋梁工学（第1・2・3巻）	日本文化協会	A 5　計 1 126	
43	〃7, 8	林猛雄	測量学（上・下）	誠文堂	A 5　計 952	綜合工学全集
44	〃7	新井栄吉	サージタンク	正興館書店	B 5　190	
45	〃7	妹沢克惟	振動学	岩波書店	B 5　816	工業物理学叢書
46	〃8	萩原俊一	発電水力	常盤書房	A 5　586	
47	〃8	物部長穂	水理学	岩波書店	B 5　598	昭37安芸・本間により改訂
48	〃8	物部長穂	土木耐震学	常盤書房	A 5　308	
49	〃8	谷口三郎	土木施工法　土木基礎工・混凝土工	常盤書房	A 5　611	
50	〃8, 10	奥田秋夫 ほか	鋼橋の理論と計算（上・下）	コロナ社	B 5　計 640	原著ブライヒ［土木工学海外名著集］
51	〃9	小野諒兄	鉄道線路撰定及建設	シビル社	B 6　366	
52	〃9,10,11	三浦七郎	鋼橋（上・中・下）	常盤書房	B 5　計 1 117	昭7の全面改版
53	〃9	福田武雄	鉄筋コンクリート理論	山海堂	B 5　612	
54	〃9	小林桀朗	隧道工学	工業雑誌社	B 5　361	
55	〃10	高橋三郎	発電水力	岩波書店	小B 6　184	岩波全書 55
56	〃10	青木楠男	鎔接鋼橋	シビル社	A 5　302	
57	〃10	渡辺貫	地質工学	古今書院	B 5　627	
58	〃11	土木工学ポケットブック編纂会	土木工学ポケットブック（上・下）	山海堂	B 6　計 3 710	
59	〃11	山口昇	土の力学	岩波書店	小B 6　206	岩波全書 81
60	〃11	宮本武之輔	治水工学	修教社書院	B 5　320	
61	〃12,17	稲田隆	鉄道工学（上・下）	誠文堂	A 5　計 804	綜合工学全集
62	〃13	武居高四郎	地方計画の理論と実際	冨山房	B 5　316	
63	〃15	小野諒兄	鉄道（上・下）	同文書院	A 5　計 531	土木工学基礎定本
64	〃15,16	成瀬勝武	弾性橋梁（理論と其の応用第1・第2冊）	工業雑誌社	A 5　計 518	
65	〃16	石川栄耀	都市計画及国土計画	工業図書	A 5　499	日本工学全書
66	〃16	石川栄耀	日本国土計画論	八元社	A 5　368	
67	〃16	林桂一	高等函数表	岩波書店	B 5　230	
68	〃17	吉田徳次郎	コンクリート及鉄筋コンクリート施工法	丸善	B 5　522	
69	〃17	本間仁	高等水理学	工業図書	A 5　342	
70	〃17	広瀬孝六郎	上下水道	山海堂	A 5　268	
71	〃17	石原・近藤・米谷	測量学　応用篇	丸善	新書　357	
72	〃17	福田武雄	構造力学	河出書房	A 5　499	応用数学 12巻
73	〃18	平山復二郎	トンネル	岩波書店	小B 6　296	岩波全書 106
74	〃18,19	久野重一郎	道路舗装法（上・下）	養賢堂	A 5　計 688	
75	〃18	石井靖丸	土質力学 1	常盤書房	A 5　286	原著テルツァギー
76	〃18	野満隆治	河川学	地人書館	B 5　314	
77	〃19	安芸皎一	河相論	常盤書房	A 5　328	昭26岩波より再版

2.　土木一般関係書（22 書）

No.	初版年	著者	題名	発行所	体裁頁数	備考
78	明19	野村龍太郎 下山秀久	工学字彙	工学協会	A 5　283	
79	大5	大谷亮吉	伊能忠敬	岩波書店	B 6　808	
80	〃7	直木倫太郎	技術生活より	鉄道時報局	A 6　460	
81	〃10	鉄道省	日本鉄道史（上・中・下・年表）	鉄道省	A 5　計 2 906	
82	〃13	西川正治郎	田辺朔郎博士六十年史	山田忠三	A 5　542	
83	〃15	浜田青陵	橋と塔	岩波書店	B 6変　250	
84	〃15	工学会	明治工業史　鉄道篇	工学会	B 5　659	全10巻の内
85	大15,昭2	土木学会	大正12年関東大震災震害調査報告書（第1～3巻）	土木学会	B 5　計 783	他・付図写真
86	昭2	中島博士記念事業会	日本水道史（別巻付図）	工政会出版部	B 5　926	付図 125
87	〃2	広井勇	日本築港史	丸善	A 5　373	
△ 88	〃4	工学会	明治工業史　土木篇	工学会	B 5　1 120	全10巻の内
89	〃5	故広井博士記念事業会	工学博士広井勇伝	工事画報社	A 5　272	
90	〃9,10	土木学会	土木工学論文抄録集（第1，第2集）	土木学会	A 4　計 891	
91	〃9	鉄道省熱海建設事務所	丹那トンネルの話	工業雑誌社	A 5　244	
92	〃11	土木学会	明治以前日本土木史	土木学会 岩波書店	B 5　1 782	1刷学会，2刷岩波，昭48岩波より3刷
93	〃11	鉄道省	丹那隧道工事誌	熱海建設事務所 土木学会	B 5　602	学会より第2刷

No.	初版年	著者	題名	発行所	体裁頁数	備考
94	昭11	土木学会	土学工学用語集	土木学会	A6 558	
95	〃11	加藤誠平	橋梁美学	山海堂	B5 115	
96	〃12	故古市男爵記念事業会	古市公威	同会	A5 438	
97	〃16	有馬宏	トンネルを掘る話	岩波書店	B6 298	［少国民のために］シリーズ
△ 98	〃17	土木学会	明治以後本邦土木と外人	土木学会	A5 295	
99	〃17	鷹部屋福平	橋の美学	アルス	B6 96	アルス文化叢書

3. 土木シリーズ（1セット）

100	昭5〜8		高等土木工学（第1巻〜第20巻）	常磐書房	A5 平均520	全20巻31編構成

1. 応用地質学／応用地震学／土性力学（平林　武／物部長穂／山口　昇：昭 7）　**2.** 応用力学／応用水理学（高橋逸夫／村野為次：昭 7）
3. 測量学（関　信雄：昭 6）　**4.** 土木材料（藤井真透：昭 7）　**5.** 基礎工及土木施工法（谷口三郎：昭 7）　**6.** 鉄筋混凝土工学前編／後編（吉田弥七／永田　年：昭 6）　**7.** 土木工事用器具機械／隧道工学（志水直彦／瀧山　與：昭 6）　**8.** 道路工学（牧野雅楽之丞：昭 6）
9. 橋梁工学（三浦七郎：昭 6）　**10.** 鉄道工学（平井喜久松／岡田信次：昭 6）　**11.** 軌道工学／高速鉄道工学（佐藤利恭／清水　熙：昭 5）　**12.** 上水工学／下水工学（河口協介／茂庭忠次郎：昭 6）　**13.** 河川工学（福田次吉：昭 6）　**14.** 港湾工学（鈴木雅次：昭 6）
15. 発電水力工学（萩原俊一：昭 7）　**16.** 電気工学／溪流及砂防工学（森田重彦・林　誠一／赤木正雄：昭 6）　**17.** 都市計画／建築工学（内山新之助／伊部貞吉：昭 6）　**18.** 土木行政（田中　好：昭 7）　**19.** 土木瑣談／近世道路史論／交通運輸（牧　彦七／和田篤憲／江守保平：昭 8）　**20.** 鉄道工学特論（池原英治：昭 8）

The dilution method of sewage disposal　-do-　1928

No. 水協-6

題名	著者名	巻号(年月)	ページ	摘要
		No.		
一宮市下水道築造規模概要		10 (9.3)	47	資料
京都市吉祥院下水処理場概要		12 (9.5)	67	〃
豊橋市下水道		22 (10.3)	80	〃
仙台市第2期下水道築造工事竣工概要	寿田 清	25 (10.6)	66	〃
広島市下水道概要		31 (10.12)	19	
竣工したる鳥羽下水処理場	中条郁一郎	75 (14.8)	30	
津守及び海老江下水処理場施設概要	鈴木蔵一	86 (15.7)	45	
下水道改良工事		118 (18.3)	44	資料
戦後の東京都下水道に就て	佐藤九郎	152 (22.4)	18	
名古屋市下水道	石橋中自鋳	181 (24.11)	27	
佐佳枝ポンプ場竣工式報告	福井市水道局	187 (25.5)	15	
川口市下水道の記録	大橋喜与司	234 (29.4)	28	
神戸市中部下水処理場の概要	海渕養之助	301 (34.10)	51	
福井市境下水処理場築造工事とその検討(その1)	寺田 初	316 (36.1)	61	
福井市境下水処理場築造工事とその検討(その2)	寺田 初	317 (36.2)	49	
福井市境下水処理場築造工事とその検討(その3)	寺田 初	318 (36.3)	58	
△岐阜市の分流式下水道について想う	安部源三郎	326 (36.11)	43	
△岐阜市の下水道について	守屋 定	326 (36.11)	45	
台湾高雄海軍基地の下水道	歌代吉尚	332 (37.5)	29	
福井市境下水処理場沈殿汚泥濃縮設備築造工事報告	寺田 初	319 (36.4)	43	
小台処理場の建設について	野中八郎	240 (38.1)	26	

No. 水協-7

題名	著者名	巻号(年月)	ページ	摘要
		No.		
ヒューム管の布設施工に就いて	小見喜平	110 (17.7)	26	
鉄道横断下水管埋設の一工法に就て	石下朋重	123 (11.8)	25	
下水管渠大きさの不足	田中貫男	227 (27.11)	19	
下水管渠埋設工事現場の心得	海老原宗蔵	235 (29.5)	32	
地下動力推進工法による下水管布設について	三神岩一	265 (31.11)	32	
円形下水管特に小管径汚水管断面の決め方について	清木直夫	327 (36.12)	26	
下水管押込作業における障害物排除の一例	高橋敏成	348 (38.9)	41	
上下水道用陶磁管について	加藤 惣	49 (12.6)	6	
ヒューム・パイプ講演会速記録		66 (13.11)	39	資料
ヒューム管に就て	小見喜平	66 (13.11)	46	
A.S.T.M.暫定規格(1924年)下水道用無筋「コンクリート」管		78 (16.7)	64	資料
下水道用コンクリート管試験報告	藤田 尊	101 (16.10)	54	
下水道用桝蓋代用混凝土蓋に就て	上田叔司	111 (17.8)	21	
ヒューム管の失敗談(水道実務講座第17講)	小見喜平	173 (24.3)	25	
陶管の改正規格について	深谷宗吉	188 (25.6)	46	
陶管(異形管)の新規格	水道協会技術部	189 (25.7)	42	
下水管渠の維持管理	田中貫男	21 (10.2)	37	
地盤沈下が下水道に及ぼす影響	東京都下水課	91 (15.12)	26	
徳川時代の江戸に於ける排水施設維持管理に就て	笹川 実	92 (16.1)	49	
木製阻水栓の使用	江川利一	119 (18.4)	20	
下水伏越渠の補修	宍地新太郎	120 (18.5)	42	

No. 水道-2

題名	著者名	巻号(年月)	ページ	摘要
名古屋市下水処分場		5.42(5.2)		
水の科学—汚水泥とその互断体の話(上)	川端勇男	5.42(5.2)		
名古屋市下水処分場築造工事		5.44(5.4)		
米国イリノイ州オロラ市下水処分場概要		5.44(5.4)		
水の科学—汚水泥とその互断体の話(下)	川端勇男	5.44(5.4)		
下水道補助費		5.44(5.4)		
水槽便所腐敗槽の汚水浄化能力並に同放流汚水の衛生学	京都市衛生試験所	5.47(5.7)		
下水道法改正の経緯		5.47(5.7)		
失業時代の善処善用		5.47(5.7)		
水槽便所腐敗槽の汚水浄化能力並に同放流汚水の衛生学(二)	京都市衛生試験所	5.47(5.7)		
水槽便所腐敗槽の汚水浄化能力並に同放流汚水の衛生学(三)	〃	5.49(5.9)		
水槽便所腐敗槽の汚水浄化能力並に同放流汚水の衛生学(四)	〃	5.50(5.10)		
大久保町下水道計画概要		5.51(5.11)		
(大) バルトン氏の広島市衛生概況報告	W.K.バルトン 宮原直堯訳	6.56(6.4)	142	
下水道施設完備の必要に就て	丹月健蔵	6.60(6.8)		
下水道の財源に就て	島崎孝彦	7.65(7.1)		
小学校便所の衛生学的調査		7.70(7.6)		
名古屋市に於ける下水と屎尿処理に就て(「都市問題」再掲)	池田篤三郎	7.70(7.6)	✓	/
[illegible]の下水利用方法に就て	石原房雄	7.71(7.7)		

No. 水道-3

題名	著者名	巻号(年月)	ページ	摘要
名古屋市に於ける下水と屎尿処理に就て(「都市問題」再掲)(承前)	池田篤三郎	7.71(7.7)		
下水汚泥処理法の一斑に就て(「都市問題」再掲)	米元晋一	7.72(7.8)		
〃	〃	7.73(7.9)		
〃	〃	7.74(7.10)		
〃	〃	7.76(7.12)		
コンクリート基礎の厚さの強度に及ぼす影響に就て	茂庭忠次郎	8.79(8.3)	3~12	
〃	〃	8.80(8.4)	3~16	
下水処分の必要と其方法の一斑に就て	丹羽健蔵	8.81(8.5)	16~25	
〃 (其二)	〃	8.82(8.6)	22~26	
促進汚泥法に依る屎尿処理の実験	沖野外	8.83(8.7)	15~22	
下水処分の必要と其方法の一斑に就て(其三)	丹羽健蔵	8.83(8.7)	23~31	
下水処分の必要と其方法の一斑に就て(其四)	〃	8.84(8.8)	11~15	
鳥取市下水道概要		9.95(9.7)	11	
[illegible]市水道創設40周年記念の催しを観る		9.97(9.9)	11~15	
活性汚泥の下水浄化に関する研究(上)	柴田三郎	11.113(11.1)	35~48	
〃 (中)	〃	11.114(11.2)	2~15	
回転式汚泥聚集機に就て	杉戸清	11.115(11.3)	1~8	
活性汚泥の下水浄化に関する研究(下)	柴田三郎	11.115(11.3)	27~48	
米国に於ける下水処理の趨勢		11.117(11.5)	45~50	
下水処分に関する当今の○○		11.117(11.5)	50~52	
下水の自動流[illegible]に就て	成瀬薫	11.121(11.9)	20~25	

雑誌「水道」水道界消息

Vol.2	1月号 鶴見町，上野町，高崎市，2月号 神戸市，3月号 名古屋市，5月号 一宮市，8月号 若松市，9月号 一宮市，11月号 深草町，東京市郊外，12月号 池田町（大阪），津居山町（京都），大阪市
Vol.3	未調査
Vol.4	1月号 大阪市，2月号 一宮市，大阪市，大牟田市，4月号 東京市，5月号 函館市，大分市，姫路市，6月号 甲府市，久留米市，神戸市，7月号 高松市，福岡市，8月号 一宮市，9月号 秋田市，10月号 岩国町，宮崎市，11月号 岡崎市，深川町，東京市
Vol.5	未調査
Vol.6	2月号 渋谷町，仙台市，川越市，3月号 秋田市，4月号 名古屋市，一宮市，5月号 東京市，西巣鴨町，名古屋市，6月号 東京府下東郊下水道組合，秋田市，7月号 倉敷市，豊橋市，名古屋市，金沢市，8月号 大阪市，金沢市，広島市，10月号 秋田市，王子町，大井町，八幡市，豊橋市，千駄ヶ谷町，福岡市，金沢市，11月号 大阪市，東京市，巣鴨町，12月号 東京市，高松市，新潟市，大阪市
Vol.7	1月号 仙台市，新潟市，横浜市，堺市，大阪市，2月号 東京府砂町外，福知山町，巣鴨町，外 未調査
Vol.8	1月号 京都市，神戸市，青森市，立川町，岐阜市，2月号 姫路市，八幡市，徳島市，高崎市，3月号 静岡市，高松市，釧路市，豊橋市，長岡市，4月号 高松市，東京市，京都市，宮崎市，夕張町，5月号 岐阜市，新舞鶴町，一宮市，横浜市，堺市，6月号 岐阜市，川崎市，宮崎市，豊橋市，精道村（兵庫県），7月号 宮崎市，秋田市，大阪市，8月号 八幡市，福島市，秋田市，京都市，東京市，9月号 岐阜市 10月号 京都市，高松市，11月号 京都市，12月号 徳島市．
Vol.9	1月号 西宮市，宮崎市，2月号 徳島市，高知市，3月号 小倉市，仙台市，京都市，4月号 松江市，5月号 鳥取市，6月号 岡崎市，8月号 宮崎市，9月号 名古屋市，京都市．
Vol.10	2月号 那覇市，3月号 高岡市，岐阜市，豊橋市，京都市，4月号 豊橋市，5月号 旭川市，8月号 京都市，一宮市，秋田市，9月号 豊橋市，11月号 岩見沢町，12月号 豊橋市
Vol.11	1月号 名古屋市，静岡市，那覇市，2月号 小野田町，八幡市，甲府市，豊橋市，3月号 静岡市，一宮市，大阪市，高松市，8月号 名古屋市，小阪町（大阪府），9月号 那覇市，福井市，10月号 那覇市，津市，瀬戸市，秋田市，11月号 大阪市，川崎市，大牟田市，12月号 洲本町
Vol.12	1月号 岐阜市，2月号 東京市，津市

雑誌 水道

水処理技術

水処理技術総目次（昭35～54）

題名	著者名	巻号（年月）	ページ	摘要
わが国における水処理の問題点	大蔵 武	1.1（35.1）		
水処理と水質保全と	佐藤尚徳	1.1（35.1）		
寒冷地下水道の問題点	神山桂一	1.1（35.1）		
下水および汚泥の集団的集約処理処理について	松本順一郎	1.5（35.5）		
大阪市中浜（東）下水処理場について	北村誠一外	1.6（35.6）		
小規模汚水処理施設とその問題点（I）	本多淳裕	1.7（35.7）		
戦後我国水処理界の展望	広瀬孝六郎	2.1（36.1）		
小規模汚水処理施設とその問題点（その2）	本多淳裕	2.1（36.1）		
ディスポーザーの下水道に及ぼす影響（I）	久保 赳	2.2（36.2）		
ディスポーザーの下水道に及ぼす影響（II）	久保 赳	2.3（36.3）		
淀川水質汚濁について（その1）	阪本 哉	2.8（36.8）		
淀川水質汚濁について（その2）	阪本 哉	2.9（36.9）		
合成洗剤の水処理に及ぼす影響	大塩敏樹	2.11（36.11）		
浮上法による下水汚泥の濃縮について	井出哲夫	3.9（37.9）		
淀川水質の流域別汚濁状況	阪本 哉	3.10（37.10）		
石狩川の自浄能とその水質の推定について	丹保憲仁外	3.11（37.11）		
本邦下水道計画の降雨強度に関する考察	石黒政儀	4.2（38.2）		
下水処理と合成洗剤	高橋政三	4.4（38.4）		
水（特に下水）処理技術の鍵をとくもの	広瀬孝六郎	4.6（38.6）		
下水汚泥およびし尿の焼却処分とその燃料的価値	本多淳裕外	4.6（38.6）		
泡沫浮上法によるABSの分解	須藤隆一外	4.10（38.10）		